

<実践報告>

「信大 YOU 遊サタデー」の実践による学生の経験幅の拡大 — 信州大学教育学部における体験的カリキュラムの創設の効果 —

那須良寛 信州大学大学院教育学研究科学校教育専攻

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

谷塚光典 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Expansion of Prospective Teachers' Experience Through the Practice of "Shin-dai YOU-Yu Saturday" — The Effect of Introduction of Field Placement into Teacher Preparatory Program at College of Education in Shinshu University —

NASU Yoshihiro: Major in School Education, Graduate School of Education,
Shinshu University

DOI Susumu: Educational Sciences, Faculty of Education, Shinshu University

YATSUKA Mitsunori: Center for Educational Research and Training,
Faculty of Education, Shinshu University

College of Education in Shinshu University introduced field placement activities, "Shin-dai YOU-Yu Saturday," as a part of preservice teacher education curricula. As prospective teachers, college of education students expanded their experience through the activities. Their reflective description on their practice was analyzed in order to clarify diverse aspects of expansion of their experience. The "Shin-dai YOU-Yu Saturday" facilitated students' growth of skills for lesson planning, communication, and material development. It provided prospective teachers with an opportunity to foster their practical teaching skills.

【キーワード】 信大 YOU 遊サタデー 教員養成 体験的カリキュラム
フレンドシップ事業 教育実習

1. はじめに

信州大学教育学部では、「子ども達に関わる実践の場」として、平成6年に「信大 YOU 遊サタデー」を開設した。このような実践的指導力養成の場の開設に伴って、文部省（当時）は、平成9年度から教員養成学部フレンドシップ事業を政策化した。この事業の趣旨

は「学生が種々の体験活動等を通して、子ども達とふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につける」ことであるが、これに関する活動による学生と子どもの学び合いは効果的なものであると捉えている。多くの国立教員養成系大学・学部が工夫を凝らしたフレンドシップ事業を実施しはじめたが、これは信州大学教育学部の取り組みからつながっているものである。

本研究は、フレンドシップ事業の基盤となった「信大 YOU 遊サタデー」を実践した学生の実践記録の記述分析および卒業後の追跡調査に基づいて、信州大学教育学部における体験的カリキュラムが学生の経験幅の拡大にどのように寄与したのかを追究することを目的とする。

なお、本稿においては、「体験とは、活動を通して学生が得た主観的な事実や意識である。それらの体験をより客観的に整理し昇華することによって、経験となる。経験が積み重なり、教師として、人間としての様々な力が備わり活用できるようになっていくこと。」を、「経験幅の拡大」と捉えている。

2. 実践記録の記述分析から

「信大 YOU 遊サタデー」を実践することによる経験幅の拡大の様相を明らかにするために、7年間にわたり 27 事例の実践記録の記述分析をすると共に、その学生の卒業後の追跡調査を行った。その結果、「信大 YOU 遊サタデー」での体験は、座学中心の授業科目のみでは容易に身につけられない教材研究力、企画・運営力、子ども理解力、コミュニケーション能力等の実践的指導力の基礎を培い、さらに教師の道へ踏み出す第一歩に大きくはずみをもたらす活動であることが明らかになった。

記述分析の事例を以下にとりあげる。なお、事例中の下線は後述のキーワードに関わる記述に筆者が付したものである。

事例 A 宇宙生物スライムをつくろう 第 1 回 平成 6 年 9 月 10 日 (土)

S.T 理科専攻 3 年

1) 体験的学習の指導案と実践の考察の要約より

1. 授業作りの着想とねらい

まず 1 つに、私は中学校の理科教師が夢なので、内容は理科に即した物でやってみたい。 今日学校現場でいわれる「理科離れ」を起こしている子ども達に、理科のおもしろさを知ってもらいたいという願いからである。2 つに、子ども達が何かを作り上げるといった、五感を通した体験をさせてあげたい。 3 つに、大学で学んだことを実際に生かしてみたい。

P・V・A 洗濯糊を使い、「スライム」というプヨプヨした実におもしろい物を製作することにした。また、自己紹介の場面では、「火で書く文字」「色の変わる文字」と称し

た演示も取り入れてみた。

2. YOU 遊サタデーと教育実習の関連

教育実習直後で、指導案を立てることも、どんなところに留意すればよいのかもよく分かっていて。緊張こそしたが、子ども達や保護者の方々、報道陣の前で、動じることなく堂々と YOU 遊サタデー初の授業をすることができたのは、何よりも教育実習での経験のおかげである。辛い6週間を乗りきった経験は、私に大きな自信を与えてくれたのだ。友人に「実習の時よりも、ずっと生き生きして楽しそうだった」と言われたが、実習と YOU 遊サタデーを通して、何かが変わったのかもしれない。

3. YOU 遊サタデーでの子ども達の取り組み

終始子ども達は、実に生き生きしていた。自己紹介の場面で、演示に少々時間をかけたため、子どもの欲求を高めることができたようだった。

子ども達は初めて出会う不思議な物体に対し、様々な歓声を上げていた。あの自然に口から出てくる歓声こそ、子ども達の探求心の現れであると思う。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

少々専門的なことを扱うため、スタッフは理科の学生にやってもらった。各班にスタッフが一人ついてもらった。子ども達に危険がないように、目が十分に行き届くようにするためである。

もう少し綿密な打ち合わせをし、私だけではなくスタッフの人たちにも、スライムの作り方とその原理をしっかりと理解してもらっておくべきだった。

5. 反省と今後の展開

今回の経験は、教師を志す私にとって非常に大きなものであった。いたらない場面も多々あったが、子ども達の活気に救われた気がする。父兄の方々が書いてくださったアンケートの中にも、嬉しい言葉がたくさんあり、本当にやって良かったと思った。

ただ、その中に、言葉遣いの改善を求められた指摘があった。YOU 遊サタデーといった学生の企画に対して、父兄の方々は、未来の教師として、言葉遣いに対しても厳しい視線を投げかけて下さっていたことを実感した。そして、生半可な気持ちではやっていけないことを改めて強く感じた。子ども達の前に立つときには、「キャプテン」として「教師」として見られていることを、心に刻んでおかねばなるまい。

<キーワード> ○実習経験を生かす ○教師への憧れ ○教師としての視点

2) 考察

今や子ども達にとって大人気の講座へと成長しているが、これが「スライム講座」の始まりである。「スライム」はP・V・A糊と、四ホウ酸ナトリウムト水をバランス良く混ぜ合わせて、どろりとした生き物のような物体を作るのであるが、子ども達が成功させるには、なかなか難易度が高い。筆者も以後の同様の講座にスタッフとして参加したが、これを完成させた子ども達の表情はとて素晴らしいものである。子ども達は、自分の感性でこの分量を変化させ、色を加えるなどして、まさに様々な表情のスライムを作って楽しむ。

これを目の当たりにする快感は今でも忘れられない。

取り組みを始めたばかりの当時は様々な苦労があったのだと感じられる。スタッフの確保も必要であり、少なくとも成功させるための原理を理解する必要がスタッフにもあったと思われる。

本講座のキャプテンは実習の成果が十分に生かされているといえる。特に、教員志望であるため、子どもに習得して欲しいねらいの通り、「理科のおもしろさを知る」こと、「五感を通して体験する」ことは十分に成果があったといえる。「子ども達は初めて出会う不思議な物体に対し、様々な歓声を上げていた。あの自然に口から出てくる歓声こそ、子ども達の探求心の現れであると思う。」という場面は、まさに情景が浮かんでくるようだ。

第1回の講座であること、保護者も講座を参観していたことから、様々な感想を真摯に受け止める姿勢が見受けられる。このような地域社会との連携をして活動を行っていく上では大変重要なことである。どのように周りの目が働いているのかを知るのに良い機会でもあるし、教育学部生が世間に目にどう映っているのか、未来の教員を目指して、自分の改善して行くべき点も知ることができたのではないだろうか。

事例B 親子でサッカー 第10回 平成8年10月12日(土)

Y.Y 数学専攻4年

1) 出会いと挑戦の記録—第3期「信大YOU遊サタデー」の実践—の要約より

1. 講座を開くにあたって

講座を開こうと思った理由は、親と子とふれあうことのできる場を提供したいと考えたからである。よく、父とキャッチボールをして遊んでもらっていたが、この心のキャッチボールをサッカーでもできないかと考え、自分の特技を生かしこの講座を開こうと決意した。親子がサッカーに興味を持ち、さらに一緒にやることで親子の絆を深めることができたらしと思い開いた。もう一つは、みんな集まってサッカーする楽しみを味わってもらいたいと思ったからである。この講座は、サッカーの好きな子が集まり楽しむものなので、どんなレベルの子でも受け入れができるのである。年齢の違う人とサッカーを楽しむことを通して、友だちの輪を広げていってほしいと思い、開いた。

2. サッカーについて

サッカーを楽しむとはどういうことか考え、思いついたのがリレーや競争形式で相手と対戦する形であった。基礎はとても大切だが、プラスおもしろさや興奮がないと、楽しくないと考えたからである。講座では、基礎的なことを競争形式にして行うことにした。この形式により少しでもレベルアップができれば子ども達の自信にもつながるし、サッカーに対する興味が増すと考えている。

3. 子ども参加者の取り組み

集まった子どもが2人、親2人で、子ども達は最初親から離れようとしなかった。自

己紹介でも、小学1年のY君は、声がほとんど聞こえないぐらいであった。

準備体操、パス練習、ボールリレーをやっていくうちに体と同時に心も温まり、さらに1年生スタッフの盛り上げなどにより、徐々に打ち解けてスタッフと話ができるようになった。特にリレーの時は、自分のチームを応援するようになり、自分の順番で目の色を変え、チームのためにがんばっていた。その後、リフティング教室でスタッフが見本の技を披露した。子ども達は、食い入るように見ていた。その後、分かれて練習したのだが、I君もY君もスタッフの応援を背にがんばり、自分の最高回数をどんどん伸ばしていった。この記録を更新したときの笑顔は、とても印象的であった。途中からT兄弟が参加して、ミニゲームを行ったが、子ども達の体力は、とてもすごかった。ただ、けがをさせないようにスタッフは気づかい、支えていた。この時のこども達の体と心は、スタッフと一体になっているのが感じられた。さらに、仲間同士で協力する様子が見られた。仲間から仲間へのパス、スタッフの間をすり抜けボールのもらいやすい位置に行き、パスをうけシュートするタイミングは、かなりチームプレーに近くなっていた。

4. スタッフの声

・私がスタッフに思ったこと

一番印象的だったのが、講座中に1年生スタッフが、「こんなことしてみたら楽しいと思うのでやってみましょう。」と、私に一声かけてくれたことである。1年生スタッフと学部スタッフの気持ちが一つになった証拠だと私は考える。

・スタッフの声

子どもの笑顔が自分の疲れをいやしてくれた。

楽しかったです。(子どもも自分も楽しめて良かった)。

最初は、自己紹介もあまりよくできなかったのに、最後はうちとけることができてよかった。

5. 講座を通しての成果、今後の課題

一番良かったのは、親も子もスタッフもけがをせずにサッカーを楽しむことができたことである。恐れていたことは、やはりけがであり、日頃あまり運動しないお父さんや、スタッフの肉離れ、捻挫にはかなり注意した。体の全体にわたる体操を重点的に行った。スポーツ講座の場合、けがには十分気をつける必要があることを実感した。

親と子のふれあいは、リフティングの場面、ゲームの場面などで親と子がお互い応援しあい、助け合うということがあり目的はほぼ達成されたが、残念であったのは人数が少なかったことである。土曜日にも仕事があるお父さんがいること、親子が一緒になければ参加できないような題目「親子でサッカー」が重なり、少なくなってしまった。題目などを工夫したらもっと楽しくできたと思う。1年生のスタッフの中では、「来年は、たくさんの子どもを集めてまたやろう。」と、言ってくれた。来年は、とても楽しみである。

いろいろな工夫を加え、また今後もスポーツ講座を開いて行って欲しい。

6. 参加者アンケートからの声や子どもの声

- ・めっちゃめっちゃ楽しかった。(T君)
- ・リフティングは、難しかったけど楽しかった。(Y君)

<キーワード> ○教材開発 ○スタッフとの連携

2) 考察

本講座の特徴は、サッカーが好きなキャプテンが、どのようにすればサッカーを親子で、より身近に感じられるかを深く考えたことにある。この点に関しては、好きな人ほど応用ができるものだと思う。面白さや楽しさを知っている人でなければ、真に他人に面白いとされるものを生み出せないと思うからである。

さらに参加者に楽しさを伝えるために、特に凝ったことをするのではなく、基礎的なことを競争形式にして行うという、シンプルな発想を生かしている。

親子の交流は親子が応援しあったり、助け合ったりしている場面が要所に見られたようである。また、年齢の離れた人同士でも交流ができるという点では、小人数での親子参加であったので、参加者に関しては充実したとは言いがたいが、大勢のスタッフがチームの一員として、密接に関わっていたようである。それによって、子どもとスタッフの違年齢間の交流は成立できたのではないだろうか。

また、「講座中に1年生スタッフが、「こんなことしてみたら楽しいと思うのでやってみましょう。」と、私に一声かけてくれたことである。」とあり、キャプテンは1年生スタッフと学部スタッフの気持ちが一つになった証拠だとしているが、1年生スタッフも講座をどのように深めていけば良いか懸命に考えた証拠であるし、単にスタッフの一員として、指示に従い動くだけではなく、クリエイティブな発想をしているといえる。

スポーツの講座にはつきもののけがに対する配慮もしっかりできていたようだ。けがの無い講座を目指すことが何よりも重要である。

7年間の実践記録の分析により、「信大 YOU 遊サタデー」の成果として、①7年間で約4300人の子ども達と関わりを持つ場を作り上げたこと、②学生が、教官や地域と連携して優れた教育力を発揮して土曜日の過ごし方を提示し地域社会に貢献できたこと、③学生が主体的に子ども達とふれあうことで、学生生活が充実し教師となるための実践的指導力の基礎を養う場となったこと、④「フレンドシップ事業」の先駆けとなり、他大学との交流が深まり今日に継続していること、の4点にあることが導出された。

3. 追跡調査の成果として

「信大 YOU 遊サタデー」を実践した本学部卒業生を対象とした追跡調査を行った。各設問で挙げられた内容は、次のように類型化することができる。

『信大 YOU 遊サタデー』の活動の中で得たこと』では、企画・運営力、子どもとの関

わり方、コミュニケーション能力（スタッフ・仲間）が得られた。『信大 YOU 遊サタデー』での経験は学校現場にどのように生かされているか』では、教材開発力（特に総合的な学習・生活科等に関わる）、授業研究の視点、授業における子ども理解に生かされている。

『信大 YOU 遊サタデー』でどんなことをしておけばよかったか』では、実際の授業を見通した教材研究・授業開発、多様な経験とその深まり（失敗や壁にぶつかって成長すること等）、学生同士の学び合い・交流をもっと深めておきたかったということが明らかになった。『信大 YOU 遊サタデー』の実行委員長・実行委員会執行部の経験は、教育活動にどのように生かされているか』については、教員間の連携（チーム・ティーチング、相互理解、意識の浸透）、現場における学校全体を見通した企画・運営力、リーダーシップ・先導する力に生かされている。

このように「信大 YOU 遊サタデー」の活動経験が、今の教育活動でも実践的な分野において大変役立っていることが分かる。意識付けという面でも十分な効果を上げている。

また、この調査では、「信大 YOU 遊サタデー」により得られる学びについて「近年、教員養成課程において実践的指導力を培うことが強く求められています。あなたは教育現場を経験された立場から、『信大 YOU 遊サタデー』を通して、どのようなことを学びましたか。」という質問をした。結果は、図1「実践的指導力として学生時代に学んだもの」のとおりである。

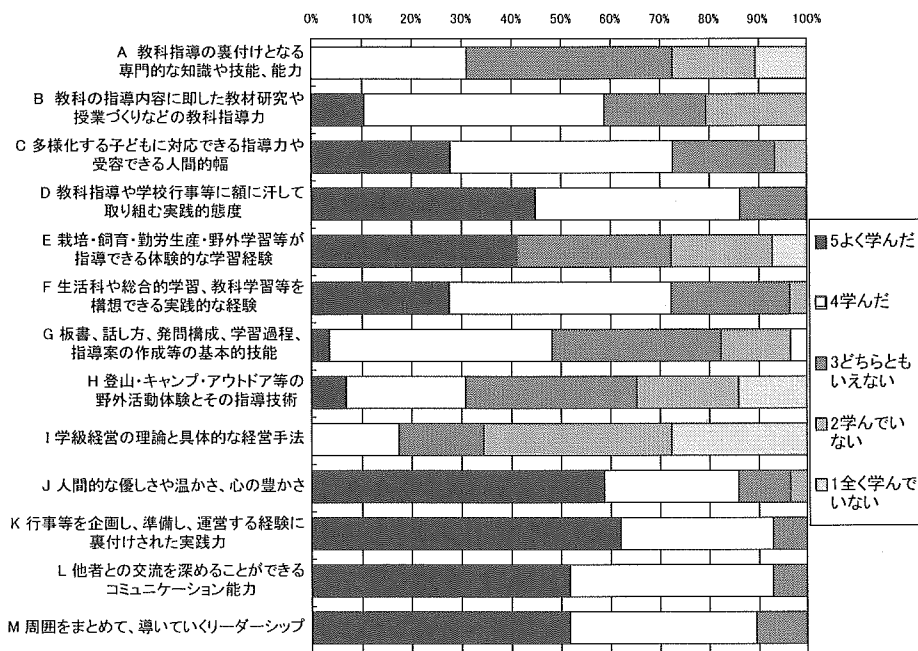


図1 実践的指導力として学生時代に学んだもの

肯定的回答が多かった項目として「信大 YOU 遊サタデー」の実践により、機能した学びとして判断できるのは、B, C, D, F, J, K, L, Mである。これら8点は「5よく学んだ」と「4学んだ」をあわせた数値で、低いもので全体の58%、高いもので全体の93%を示している。これにはYOUサタで保証される力の多様さ、大きさに驚かされる。

肯定的回答が少なかった項目として「信大 YOU 遊サタデー」の実践により、機能しなかった学びとして判断できるのは、A, H, Iである。Aにおいては、「5よく学んだ」を選じた者が全くなく、「4学んだ」で全体の31%である。Hにおいては、「5よく学んだ」があるものの「4学んだ」と合わせて31%である。Iにおいては、学んだという回答が17%で、「2学んでいない」、「1全く学んでいない」の回答が65%を占めている。

このような極端な結果が表れた理由としては、Hのような内容を含めた講座がほとんど開かれておらず、全く開講されなかった期もあり、むしろYOUサタ以外の場で学ばれているといえる。また、AやIといった技能は講座の種類によって違いが現れてしまうこと、このような深いねらいまでは持ち合わせていないことなどが考えられる。また、教員の経験年数の多い被験者ほど、YOUサタの活動では当てはまらないというように捉えている。

課題としては実際の専門教育の技能、教育に関わる技術は、まだまだである。実のところ学びが保証できる過程に行き着くまでの講座の準備やねらい等が短絡的であり、身につかないという事実もある。この点を切り口にして、自己の能力や可能性を引き出していく一助としてより意識することが重要である。

しかし、「信大 YOU 遊サタデー」は、あくまで上記13項目全ての学びを保証する方向性を持った活動ではないということを了承いただきたい。ひいては、13項目全てを保証できる活動など皆無であるといえる現在、「信大 YOU 遊サタデー」は、8項目を保証できるというすばらしい点がある。

4. 学生の経験幅の拡大

これまでの教員養成カリキュラムは、教員養成に不可欠の学びの場であったが、受身的な授業が圧倒的に多く、教員養成の授業であっても、実際に臨床経験をを用いることはなかなかなかった。これは、教科専門科目と、教職科目・教科教育法科目を対立的に捉えていたことも一因にあった。これに対して、教育実習という臨床経験の現場が与えられえていたが、この限られた期間では、子ども達と生活をともにしてふれあいながら相互理解を深めていく場として、また教員志望の学生達にとって確かな学びを確保できる場として、決して十分ではなかった。これらをバランスよく併せ持つ環境作りをする必要があった。

それに対して「信大 YOU 遊サタデー」は、教員養成カリキュラムの成果を実践に生かす場、自己表現の場であり、達成感を得る場である。学生達の自主的・主体的な活動により、これまで満たされなかった臨床経験を存分に行う場でもある。これにより、図2に示すように、教員養成カリキュラムと教育実習がともに昇華された型が体験的カリキュラムとして位置づけられ、信州大学教育学部はその代表格が「信大 YOU 遊サタデー」である

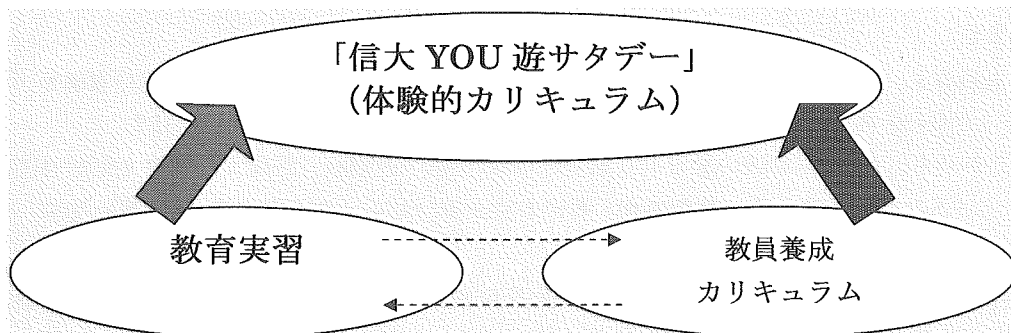


図2 教員養成カリキュラムが充実する型

といえる。

「信大 YOU 遊サタデー」の成果と、実践による学生の成長を論じてきたが、これからの教員養成カリキュラムを編成する際に「信大 YOU 遊サタデー」のような体験的カリキュラムを重要視していくべきである。

国立教員養成系大学・学部のフレンドシップ事業の旗上げ（政策化）からはや6年が過ぎた。様々なフレンドシップ事業が展開されているが、真によりカリキュラム作りを行っていくには、学生が授業の制約にだけ翻弄されるのではなく、自己を改革し、あるべき自分を創造していける場を提供してほしい。これは、大学側と学生側の心の通い合い、「フレンドシップ」によってのみしか実現できないものだからである。

本研究では、経験幅の拡大というキーワードをもとに分析を行ってきた。これは、「人間力」、「教材開発力」、「授業組織力」につながる種々の力の養成である。

子どもに寄り添う「人間力」は、活動の中で、子どもとどのように関わっていくかを試行錯誤しながら学び、考えることで身につけていく力であると捉える。子どもの学びを引き出す「教材開発力」は、「教育実習」のみでは、一度きりの挑戦であった教材研究を、自己を充実させる「信大 YOU 遊サタデー」等の活動を通して練磨される力であると捉える。そして、子どもと教材を結んで学びを成立させる「授業組織力」は、子どもと学びをつなげる、実際に「人間力」と「教材開発力」をつなげて、どのような場を作っていくかという大変重要なこと、それが「授業組織力」であると捉える。体験的カリキュラム（特に「信大 YOU 遊サタデー」）には、これら3点を養成するための要素が多く含まれる。

学生が、自主的・主体的に取り組むことを前提とした体験的カリキュラムは、実践的指導力の養成に役立つといえる。また、経験幅の拡大は自己という器の成長であり、そこから溢れ出す力であり、そこに蓄積した体験が昇華され経験となり、積み重なって力を生み出すということで、実践的指導力の基礎を養う段階で重要な成長の形でもあるといえる。

経験幅の拡大に作用しているものは「きっかけ」であり、体験的カリキュラムを学生が実践することにより、多くの学びが得られ、成長していくきっかけとなるといえよう。

文献

- 上島清文, 1999, 『『生きる力』支援プログラムによる共育という学び方』, 山口満編著『子どもの生活力がつく「体験的な学習」のすすめ方』, 学事出版, pp.138-157
- 小林辰至, 2000, 「体験の教育的意義及び体験活動の類型化」, 宮崎大学教育文化学部における教員養成のための教育内容・教育方法改善プロジェクト報告書『「体験的な学習」をどのように実践するか』, pp.53-60
- 小林輝行, 土井進, 1997, 「授業科目『教育参加』の開設について」, 『信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』5, pp.143-149
- 土井進, 1998, 「臨床経験の授業科目『教育参加』の開設と効果」, 日本教師教育学会年報(7), pp.155-170
- 土井進, 1999, 「教員養成カリキュラムにおけるフレンドシップ事業の役割」, 平成10年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書『地元教育機関と連携した「教育参加」の実践』(第3集), 信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター, pp.105-107
- 土井進, 2002, 「教育実習による学生の成長」, 日本教師教育学会編『講座 教師教育学Ⅱ <教師をめざすー教員養成・採用の道筋をさぐる>』, 学文社, pp.65-78
- 那須良寛, 土井進, 谷塚光典, 2002, 『『教育参加』における学生の体験内容の分析ー国立信州高遠少年自然の家での活動レポートからー』, 『教育実践研究』(信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要)3, pp.117-126
- 濁川明男, 2001, 「全国フレンドシップ事業の現状と課題ー全国教育系大学・学部のフレンドシップ事業に関するアンケート調査結果よりー」, 第59回国立大学教育実践研究関連センター協議会事業プロジェクト「教育実践・教師教育部門」資料
- 濁川明男, 2002, 「現職にある卒業生は、教員養成課程カリキュラムをどう振り返っているか」, 第61回国立大学教育実践研究関連センター協議会事業プロジェクト「教育実践・教師教育部門」資料
- 文部省, 1997, 『平成9年度「我が国の文教施策ー未来を拓く学術研究ー」』, 大蔵省印刷局
- 谷塚光典, 土井進, 東原義訓, 2001, 「臨床経験科目『教育参加』における学生の体験内容」, 『信州大学教育学部紀要』104, pp.23-34

(2003年4月30日 受付)